

茨城県行方市

細 田 平 遺 跡

発 掘 調 査 報 告 書

2006年12月

行方市教育委員会

行方市遺跡調査会

## 序

行方市は、茨城県の東南部に位置し、平成17年9月2日に麻生町・北浦町・玉造町の三町が合併して誕生しました。人口約4万人、面積は、166.33km<sup>2</sup>になります。

北は鉾田市と小美玉市、南は潮来市に隣接し、東は北浦、西は霞ヶ浦(西浦)に面します。

地形的には東西の湖岸部分は低地、内陸部は標高30m前後の丘陵台地「行方台地」により形成されており低地は水田、台地は畑地として利用されています。霞ヶ浦沿岸部は概ねなだらかなで連続的な稜線が見られるのに対し北浦側は屈曲、出入りが見られ比較的起伏に富んでいます。

気候は比較的温暖で豊かな自然環境に恵まれ、古くより人々の生活の場となり、幾多の歴史が残されており。現在でも、その人々の痕跡として、貝塚、古墳・城館などの遺跡が市内に数多く点在しております。

この度、行方市西蓮寺字細田平1335、1338-30番地周辺での土砂採取工事の申請があり、申請面積が広範囲にわたる為、当教育委員会は確認調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代前期頃の遺構が確認され、また土器が出土したため、遺跡発見の届出を県に提出し、周知の遺跡(細田平遺跡)として認定されました。

文化財保護の観点から事業者との間で協議を重ねましたが、現状維持保存が困難であることから、やむを得ず発掘調査による記録保存をすることになりました。

今回の調査の結果、縄文時代前期の住居跡、土坑が出土し大きな成果が得られ、本報告書にまとめられましたことに厚く感謝申し上げます。

本報告書作成に際し、発掘調査並びに報告書の執筆を担当頂きました関係各位に対し心より敬意を表し、この報告書が郷土の理解、より深く知る上で広く一般の方々に活用いただければ幸いと存じます。

最後に、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、そして開発事業者をはじめ、地元関係者各位のご理解とご協力に感謝の意を表するとともに、調査に携わっていただいた方々に心からお礼を申し上げます。

平成18年12月

行方市教育委員会

教育長 平山一己

## 例 言

- 1 本報告書は茨城県行方市西連寺1338-30番地他に所在する細田平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(有)幸新取材の土砂採取に伴う記録保存の発掘調査で、対象面積は1,000㎡である。
- 3 調査は平成18年5月5日に確認調査、6月22日、23日に遺構の確認された部分の表土の除去を行い時期、性格、数等を確認、発掘調査は7月25日より8月4日までの6日間と遺構確認の2日、計9日間実施した。整理作業は平成18年8月5日～11月22日までの三ヶ月間半で行った。
- 4 調査区は、以前農地「畑」として利用され、牛蒡等の栽培がなされ大部分が攪乱、削平を受けていた。
- 5 調査会組織

会 長	平山 一巳	(行方市教育委員会教育長)
副会長	風間 亨夫	(行方市文化財保護審議会会長)
理 事	茂木 岩夫	(行方市文化財保護審議会副会長)
	植田 敏雄	(行方市文化財保護審議会委員)
	羽生 均	( " )
	宮内 俊雄	( " )
	宮内 利夫	( " )
	高野 顕	( " )
	吉田 秀邦	( " )
	伊勢山雅昭	( " )
	宮崎 幸男	( " )
	大場 浩一	( " )
	小沼 政雄	( " )
	海老原幸雄	( " )
	汀 安衛	(調査担当者 )
	金山 貢大	((有)幸新取材代表取締役 )
監 事	本戸 俊文	(行方市文化財保護審議会委員 )
	高橋 量光	( " )
事務局長	山野 洋治	(生涯学習課長 )
	原田 かつ子	(生涯学習課 社会教育G係長)
	横瀬 浩司	( " 主幹 )
	高田 和明	( " 主任 )
	小出 将史	( " 主任 )
	磯山 智也	( " 主任 )

### 指導及び関係機関

茨城県教育庁文化課

## 凡 例

- 1 本報告書の縮尺は図中に表示したが、遺構は原則として1/60、遺物は1/10とした。水系レベルは標高を図中に表示した。
- 2 報告文、写真、遺物実測、トレースは汀、遺物水洗い注記、図面作成、は徳利初代が主に行い、汀 安衛が総括した。
- 3 調査にあたり次の方々にご協力を受けた。記して感謝の意を表したい。茨城県教育庁文化課、行方市教育委員会、鹿行教育事務所 茨城県歴史館斎藤弘道氏 徳利初代、三宅浩明、三宅ゆき子、飯岡忠孝、高須 郁夫

抄 録

ホソタイルイキハツツチヨウサホコクシヨ

書名 細田平遺跡発掘調査報告書  
発行者 行方市遺跡調査会、行方市教育委員会  
所在地 行方市山田2175  
編集者 汀 安衛  
編集機関 鹿行文化研究所  
所在地 茨城県鹿嶋市青塚718-1  
発行年月日 2006年 12月20日  
所収遺跡名 細田平遺跡  
所在地 行方市西連寺字細田平1338-30他  
市町村番号 425  
遺跡番号 093  
東経140° 27' 10" 北緯36° 4' 30"  
調査期間 2006年7月25日～2006年8月4日  
調査面積 1,000㎡  
調査原因 土砂採取に伴う記録保存  
所収遺跡名 細田平遺跡  
時代 縄文時代前期  
主な遺構 住居跡、土坑  
主な遺物 縄文土器、貝類

# 目 次

序文	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
I 遺跡の位置と史的環境	1
II 調査に至る経過	2
1 調査に経緯	2
III 調査の概要	
1 1号住居跡と出土遺物	3
2 2号住居跡と出土遺物	4
IV 土坑	
1 1号土坑と出土遺物	7
2 2号土坑と出土遺物	7
3 3号土坑と出土遺物	7
4 4号土坑と出土遺物	9
5 5号土坑と出土遺物	9
6 6号土坑と出土遺物	9
7 7号土坑と出土遺物	9
8 8号土坑と出土遺物	9
9 9号土坑と出土遺物	9
10 10号土坑と出土遺物	10
11 11号土坑と出土遺物	10
12 12号土坑と出土遺物	10
13 13号土坑と出土遺物	10
14 14号土坑と出土遺物	12
15 15号土坑と出土遺物	12
V 結びにかえて	13
挿 図 目 次	
第 1 図 遺跡位置図	1
第 2 図 遺構位置図	2
第 3 図 1号住居跡	3
第 4 図 1、2号住居跡出土土器拓影図	5
第 5 図 2号住居跡実測図	6
第 6 図 2号住居跡出土土器拓影図	7
第 7 図 1、2、3、4号土坑実測図	8
第 8 図 5、6、7、8号土坑実測図	10
第 9 図 9、10、11、12、13、14、15号土坑実測図	11
第10 図 1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15号 土坑出土土器拓影図	12

図版目次

- PL 1 調査前の状態、1号住居跡、2号住居跡、遺物出土状態及び完掘
- PL 2 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9号土坑完掘状態
- PL 3 10. 11. 12. 13. 14. 15号土坑完掘状態
- PL 4 1号、2号住居跡出土遺物
- PL 5 2号住居跡出土土器
- PL 6 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 13. 14. 15号土坑出土遺物遺物  
4号土坑出土ハマグリ、アサリ、サルボウ

## I 遺跡の位置と史的環境 (第1図)

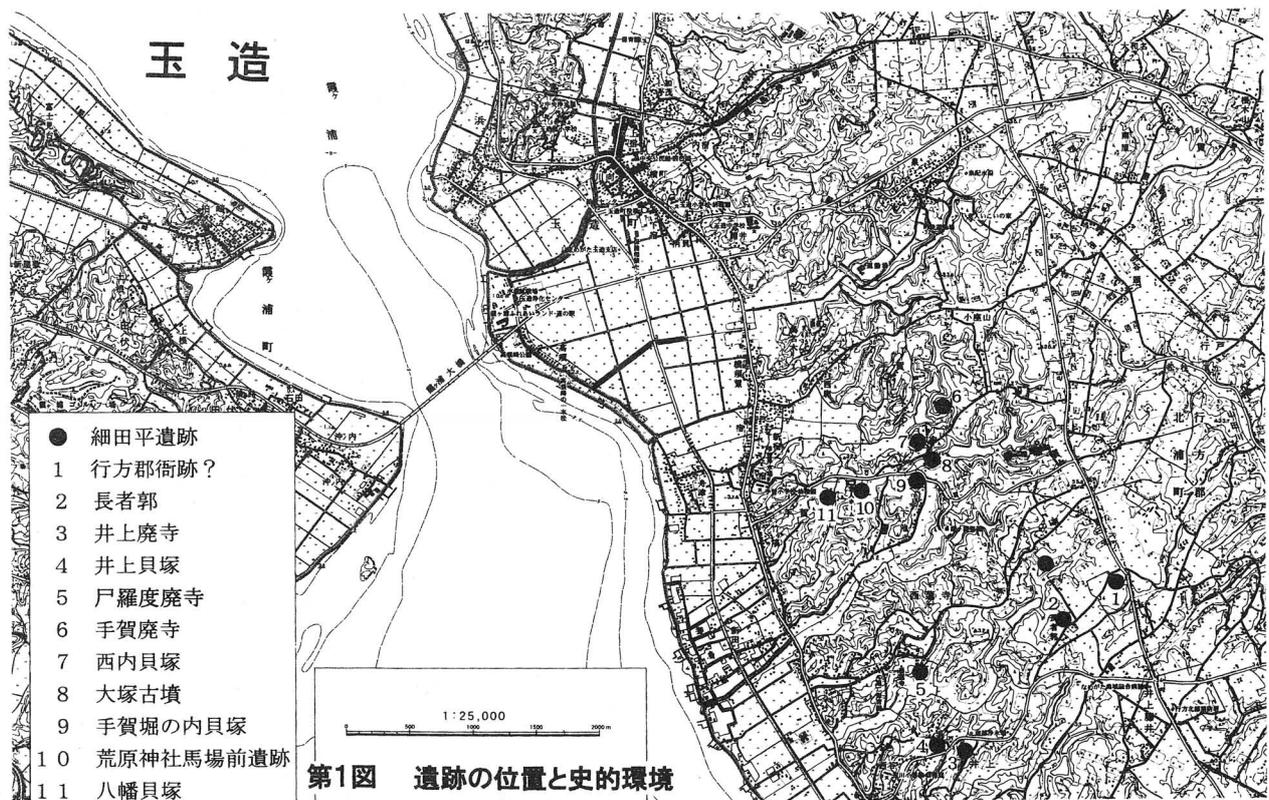
本遺跡は、茨城県行方市西連寺字細田平1035番地他に所在する。遺跡の所在する行方市は茨城県の東南部に位置し東側を北浦、西側を霞ヶ浦(西浦)に面し、台地は中央部まで東西からの中小河川によって樹枝状に支谷が解析され凹凸、屈曲の激しい地形を呈している。これらの支谷縁辺または半島状、また舌状台地の上には縄文時代～近世にかけて多くの遺跡が発見され、東西に広がる湖岸沖積地は古来より水田として利用されており、こうした恵まれた自然環境の中で縄文時代から多くの遺跡が存在したことから、人々の営みを知る事が出来る。

調査した遺跡は、地理的に台地中央部に位置し周辺には登録遺跡は皆無に近い。西側、南側の霞ヶ浦東岸近くへの1キロ～2キロほどの西連寺地区、井上地区周辺には縄文時代の遺跡や古墳時代の集落跡や古墳が見られ、南側の直線距離にして約1キロには古代の行方郡衙跡と推察される井上長者館がある。西方には、西蓮寺の前身の尸羅度廃寺跡、北方には手賀廃寺が所在し、遺跡北西側には八幡平貝塚、手賀古墳群、井上地区には井上貝塚、井上古墳群、井上廃寺など縄文時代中期から奈良、平安時代にかけて多くの遺跡が存在している。

細田平遺跡は、土砂採取に伴う確認調査によって新たに発見された遺跡である。位置的には、支谷の最奥部に占地しトレンチ調査に依って縄文前期の土坑が認められ、更に遺構の広がり調査の結果、2軒の住居跡と15基の土坑の存在が認められた。確認調査結果をもとに1000㎡を調査範囲とし、発掘調査を行った。

現在まで行方市地域での縄文時代前期の住居跡調査例は皆無である。また同時期の完形品に近い土器は、昭和47年7月に旧北浦町山田地区の鶴ヶ居貝塚の調査に依って出土しているが、詳細は不明に近い。(土器は北浦公民館、現行方市考古資料庫、報告書の土器は中期加曾利E式)

現在まで鹿行地域では、縄文時代前期の住居跡、土坑のセット関係での調査、報告例は管見しない。



第1図 細田平遺跡の位置と周辺遺跡

## II 調査に至る経緯

平成18年2月10日、(有)幸新取材より山砂利採取計画に伴い埋蔵文化財の有無について行方市教育委員会に紹介が出された。

同3月20日に確認調査を実施した結果、山砂採取予定地の約1,000㎡の範囲に遺構が発見されたため、県教育委員会へ遺跡発見の届けを提出し、同5月16日に周知の埋蔵文化財として認定された。

その後保護と取り扱いについて県教育庁文化課の指導の下、行方市教育委員会と(有)幸新取材と協議を重ねた結果、現状保存が困難であることから記録保存による措置を講ずることとなった。

発掘調査は7月23日から8月10日の予定で発掘調査の実施に至った。

調査終了後、整理作業に入り12月報告書が刊行された。

## III 調査の概要 (第2図)

調査区は標高34.5mを測り周辺では最高所部分である。畑地造成のため馬の背状部分の一部は50cm程削平、整地し利用されていた。

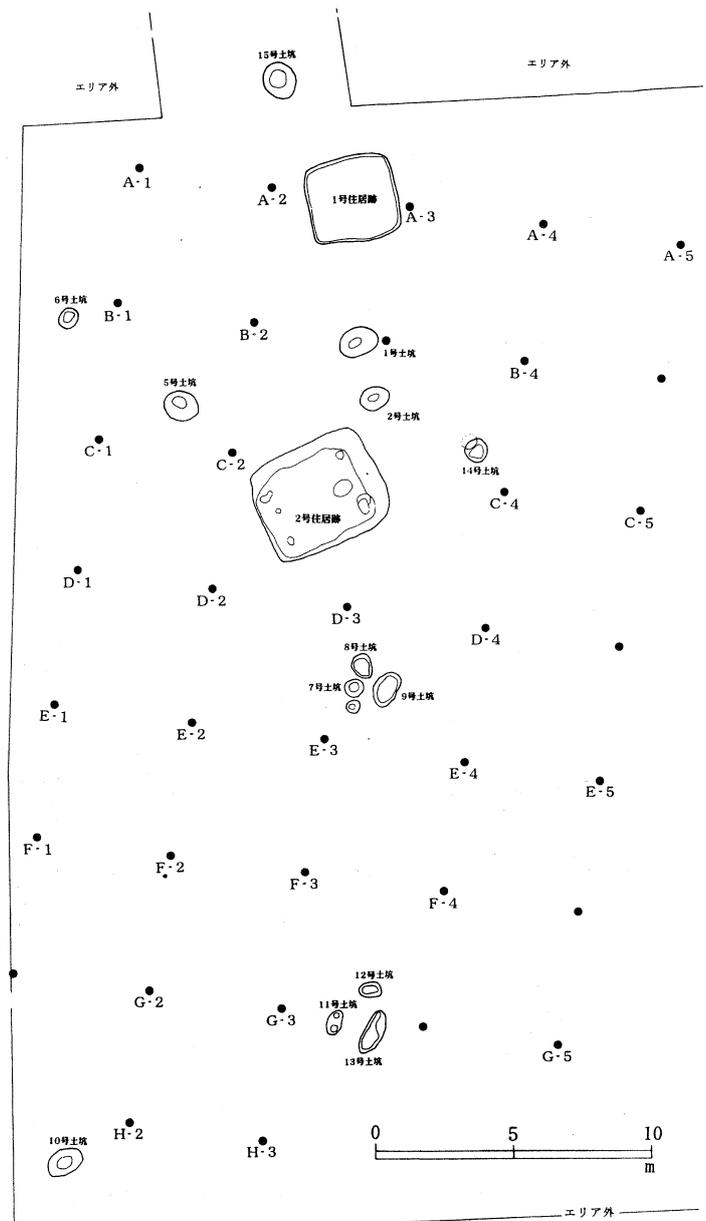
調査は確認トレンチによって得られた資料から調査区を1000㎡に拡幅し、遺構の分布を確認したところ、大半は牛蒡栽培で攪乱されており、一部畑地の境界部分に攪乱の入らない部分が存在し、この部分から住居跡、土坑が認められた。したがって総ての遺構は牛蒡栽培のトレンチャーにより攪乱を受けていた。

検出された各遺構は、畑地耕作、削平のため遺存状態極めて悪く浅い。遺構は、第2図に示す様に住居跡2軒、土坑15基が認められ、検出された遺構は、出土遺物から縄文時代前期中葉の浮島式I式を主とした時期であった。

住居跡のプランは隅丸方形プランで、いずれも攪乱がひどく、遺物も少なく完形土器は皆無、出土土器も総数350点と少ない。2号住居跡の中には黒色土のみの3号土坑、ハマグリなどを含む4号土坑が検出された。

その他の土坑は、いずれも攪乱が多く円形、長円状で浅かった。14号土坑は、貯蔵穴と思われるもので中期のフスコ状とは違い、円形掘り込みを斜め方向に2段に掘り込む特異な形態を持つ。

以下、住居跡、土坑の各遺構の特徴と出土遺物について述べる。



第2図 遺構位置図

# 1 1号住居跡と出土遺物 (第2図. 第3図. 第4図)

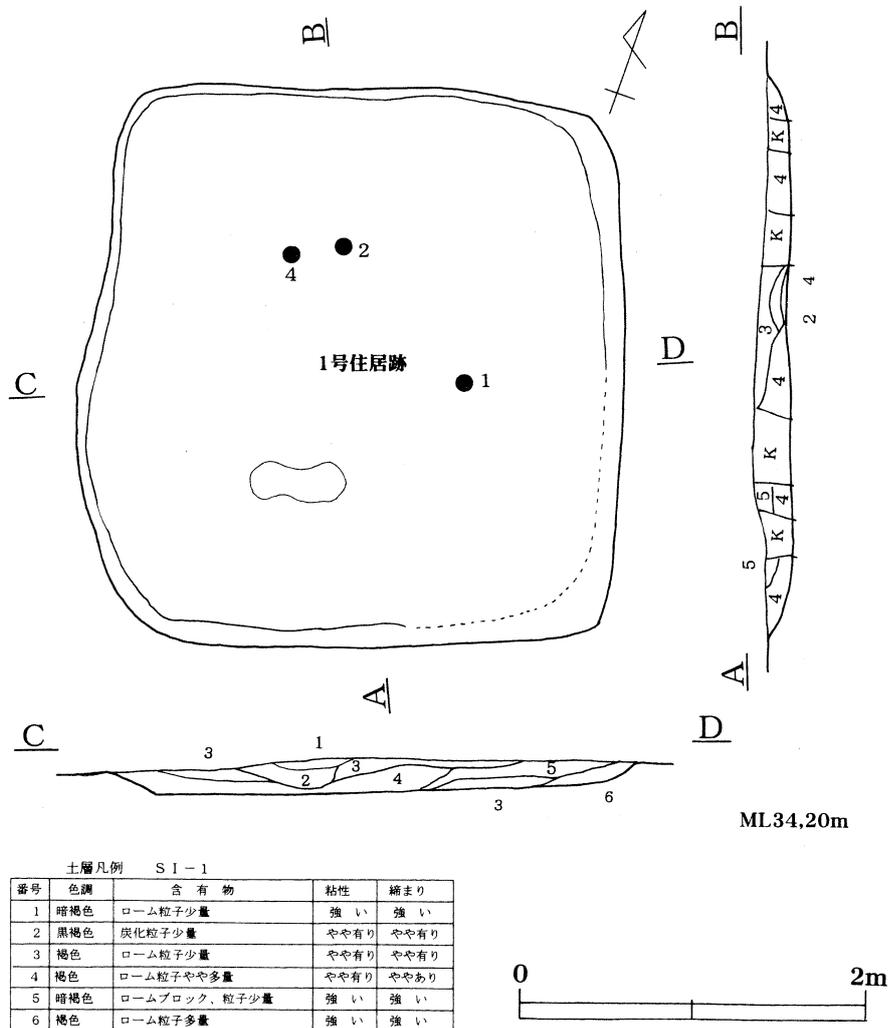
本住居跡はA2・A3グリットの間位置し、主軸をN-105°-Wに置き、東西3.1m南北3.3mの隅丸方形を呈し、掘りこみは確認面から15cm前後と浅く南東隅部では範囲の確定のみに近く、浅い。壁面は、東西南北ともに緩やかな立ち上がりを呈する。

土層は5層に分けたられたが、基本的には暗褐色、黒褐色、褐色で投げ込み的埋積で、3層を除き何れもローム粒子、ブロックと炭化粒子の混入の差であり、粘性、締まりはやや有る。床面の状態は牛蒡栽培のトレンチャーによる攪乱が見られ遺存部ではやや締まりを持つ硬い面も認められるが、壁面周辺は、やや柔らかい。

遺構内部からは柱穴、炉跡も確認出来なかった。

遺物は、掘りこみ覆土が浅い分少なく、総数100片程で完形品は無い。図示した主な遺物は第4図1~7で、いずれも小片のみであった。1は、深鉢形土器で、口唇部はやや角張り磨消、撚糸文の地文の上に平行沈線による鋸歯状文を不規則に五段程施文。内面はやや粗雑な調整で、色調は黒褐色に近く胎土に細石を含み焼成はやや悪い。2、3は、器肉の薄いやや小型の浅鉢形土器で口唇部はやや薄く口縁部と胴部に平行線文を巡らし、間に鋸歯文を4段配する。色調は黒褐色、内面は褐色で調整は丁寧、細石を含み焼成は良い。3も同一個体と思われる頸部破片。4は、無文地に結節文を施す胴部で灰褐色、焼成は良く、やや多量の繊維、細石を含む諸磯b式。5は撚糸の地文に木の葉状文を配する胴部片で器肉は厚い。6は口縁部で角張り地文の撚糸文が伸びる。爪形文を一条、下位は木の葉状文、焼成は普通で暗褐色。7は、爪形刺突と平行沈線による肋骨文を施し、地文には撚糸文。細石やや多量、小石、雲母を少量含む。焼成は良く暗褐色。

本住居跡は出土土器から浮島I式後半の範疇と思考する。



第3図 1号住居跡実測図

## 2 2号住居跡と出土遺物 (第4図、5図、6図)

本住居跡は、1号住居跡の西側8m程のC2、C3グリットの間に位置し検出された。主軸をN-120°-Wに置き長軸を南北方向に置き規模は4m×3.7mを測り、隅丸方形プランを呈する。掘り込み深さは約30cmを測る。壁面に添って南側の一部を除き幅10~50cm程ベット状の段が巡る。

覆土の1、2層は、レンズ状で自然埋積が考えられる。3、4、5層は堆積状態から投げ込みが考えられ色調、混入物も差違がある。いずれも粘性、締まりは強い。床面は中央、炉址周辺は良好な締まりが見られた。

主柱穴は4本、各隅部に認められた。北西部は攪乱がひどく他に比べ20cmと浅い。また北、南側では主柱傍に小穴が見られた。掘り込みは40~50cm。径は30cm前後と小さい。

炉址は中央部から南に寄り位置し、床面を掘りこんだ長円形の地床炉で掘りこみの深さは15cmを測る。

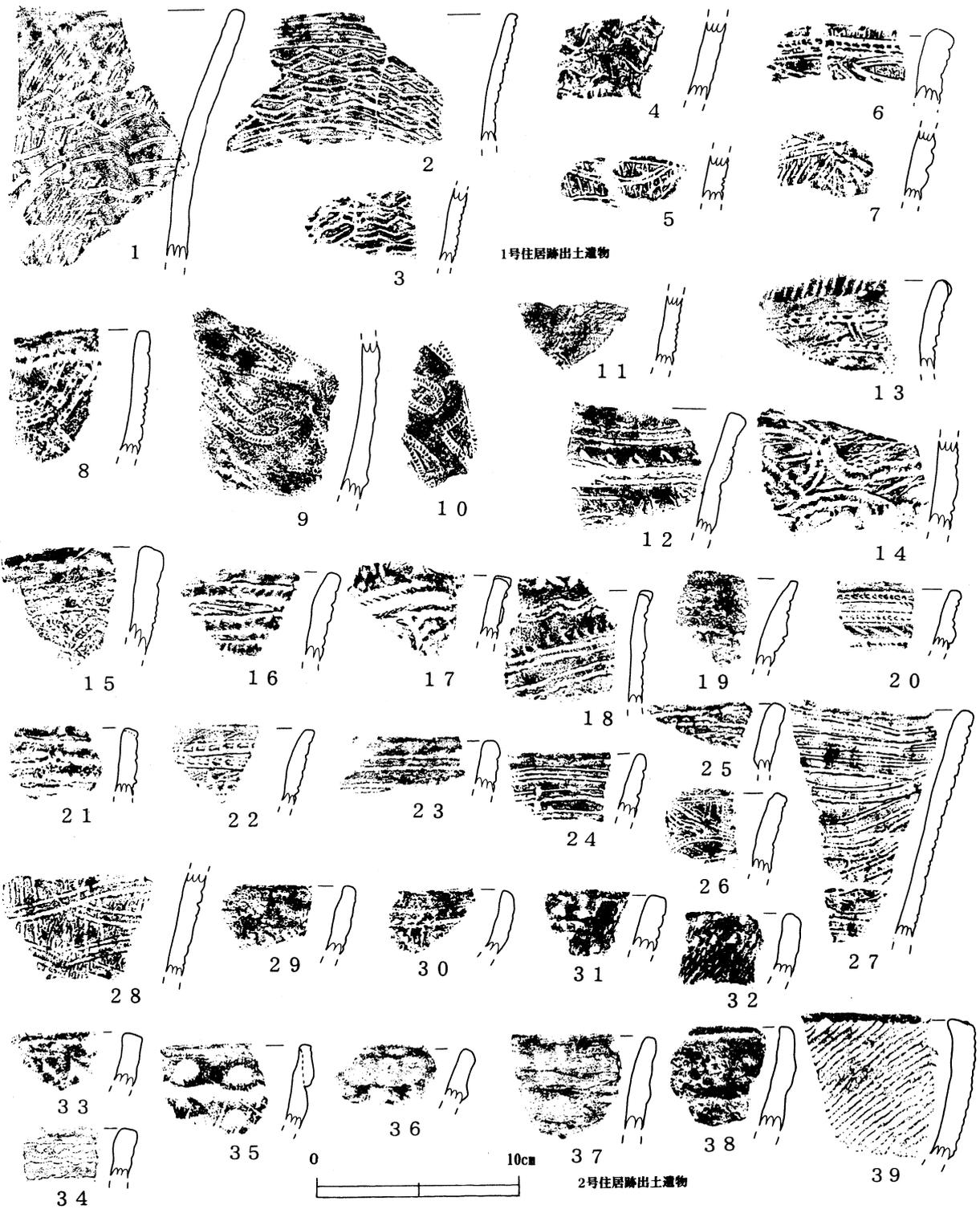
遺物は土器約170片と小礫が出土した。完形品は見られず器形の伺えるものが第6図1~4がある。口縁部は波状を呈し、波頂部に右側からと左側からの刻みを施す1と3があり、口縁部に4条の爪形文とアナダラ属の山形文を地文とする1と波頂部に太目の刻み目を左側から施し、有節平行沈線文を弧状に施し下位は二条に巡ると思われる。地文にはアナダラ属の山形文を施し、色調は暗褐色、焼成は良い。胎土に雲母、細石を少量含む。

2、4は口縁部を欠失する深鉢で有節平行沈線文を施し、地文にハマグリとアナダラ属の山形文をそれぞれ施している。鈍い褐色で細石、雲母を少量含む、焼成はやや悪い。4は胴部上半部に穿孔を持つ。浮島I式の末か。

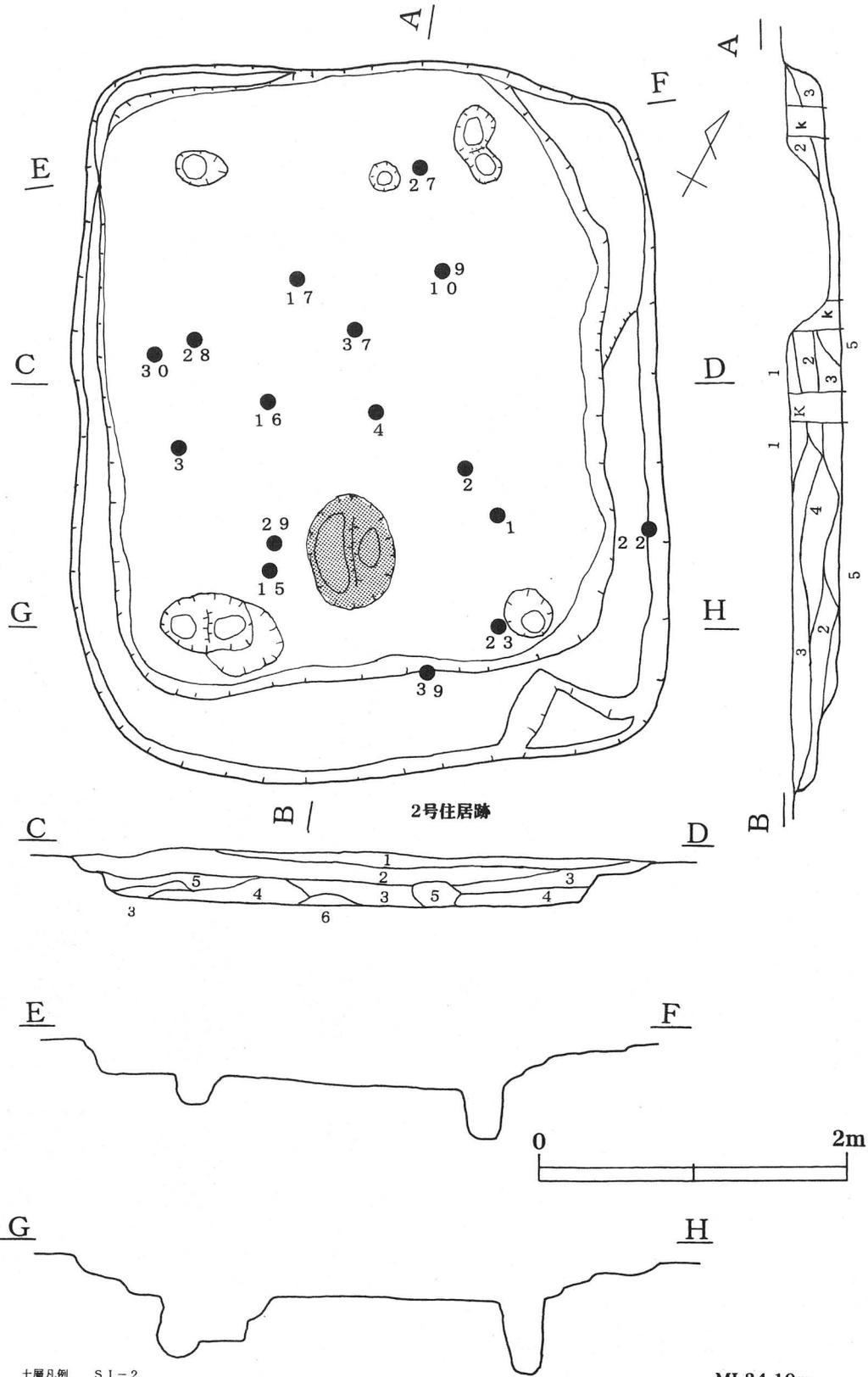
第4図8~39は口縁部、胴部片で8は口縁部に刻み目、一条の浮線に刻み、刺突文を3条U字状に上下に施文すると思われる。黒褐色で胎土には繊維、細石を含む。9、10は爪形文を用い木の葉状入り組み文、楕円、三角形などのモチーフを持つ胴部で器肉は厚い、細石を多量、繊維を極少量含む。11は押し引きの上に円形刺突文の左右は無紋と撚糸文に分れる胴部片で褐色、焼成は良い。いずれも諸磯式b式土器

波頂部の口唇部に刻みを持つ13、17、18は比較的器肉が厚く大型の深鉢で、爪形文、平行線文を横位に施し鋸歯状文を配する。17は浮隆線部にも刻みを施しいずれも少量の繊維、雲母、細石を含む。16、17は諸磯b式。口縁部無紋の12は波状を呈する深鉢形土器で口縁部下位に棒状工具による刻みを入れ、無文部に平行沈線を配し、黒褐色で少量の雲母を含む。18は口唇部に「ハ」の字状の刻みを入れるもので無文地に爪形文を配し、黄褐色で繊維をやや多く含む。15は平縁で器肉の厚い大型の深鉢と考えられ変形爪形文を横位に施し、地紋はアナダラ属の山形文黒褐色で少量の雲母、細石を含み焼成は良い。16は大型の爪形文を三条施文、19は口縁部が薄く尖り外反、変形の爪形文を横位に施文、雲母、細石をやや多く含む。褐色で焼成は良い。20は小型の爪形文を横位に施文、隆帯部には刻み目を入れる。器肉は薄く焼成は良い。20はやや直立気味の器形で大型の爪形文を施文、22は爪形刺突、器肉は薄く外反焼成は良い。23、24は平行沈線を施文、24には刻み目状の刺突が見られる。共に砂の混入が多く器面は粗い。25は変形爪形文が施文され。26は横位、木の葉状、肋骨文状に平行沈線で施文。27はやや大型の破片、波状口縁をもち胴部は総て平行沈線、胴部は木の葉状モチーフで黒褐色。28は地文に疎らな撚糸文が見られる胴部で平行沈線が横位、木の葉状に展開する。29口縁部に横位にアナダラ属の山形文と爪形刺突文を配する特異なもので本例のみ。細石を多量、雲母を含み淡い赤褐色で焼成、調整は良い。30は小型の浅鉢形土器で口縁部は内傾気味で波状を呈する。変形爪形文を無文地に配する。

31は連続三角文を口縁部から横位に施文、細石をやや多く焼成は良く黄褐色。32は変形な角押文が見られ地文は撚糸文、焼成は良く褐色。33は弱い波状を呈すると思われる鉢形土器、口縁部は内側に覗きハマグリ等による山形文がみられ灰褐色、焼成は良い。34は変形の爪形文を口縁部下から施し、35、36は口縁部の添付した上に指頭押圧が見られ、下位は沈線による格子状文を施し砂の混入が多く器面は粗雑で細石を含み焼成は良く暗褐色。37は無文?指頭押圧か。38は地文としてアナダラ属の山形文が不規則に横位に施文されている。39は口縁部が内傾する鉢形土器で縄文のみで多量の繊維を含む黒浜?式土器か。



第4图 1. 2号住居跡出土土器拓影图



2号住居跡

ML34,10m

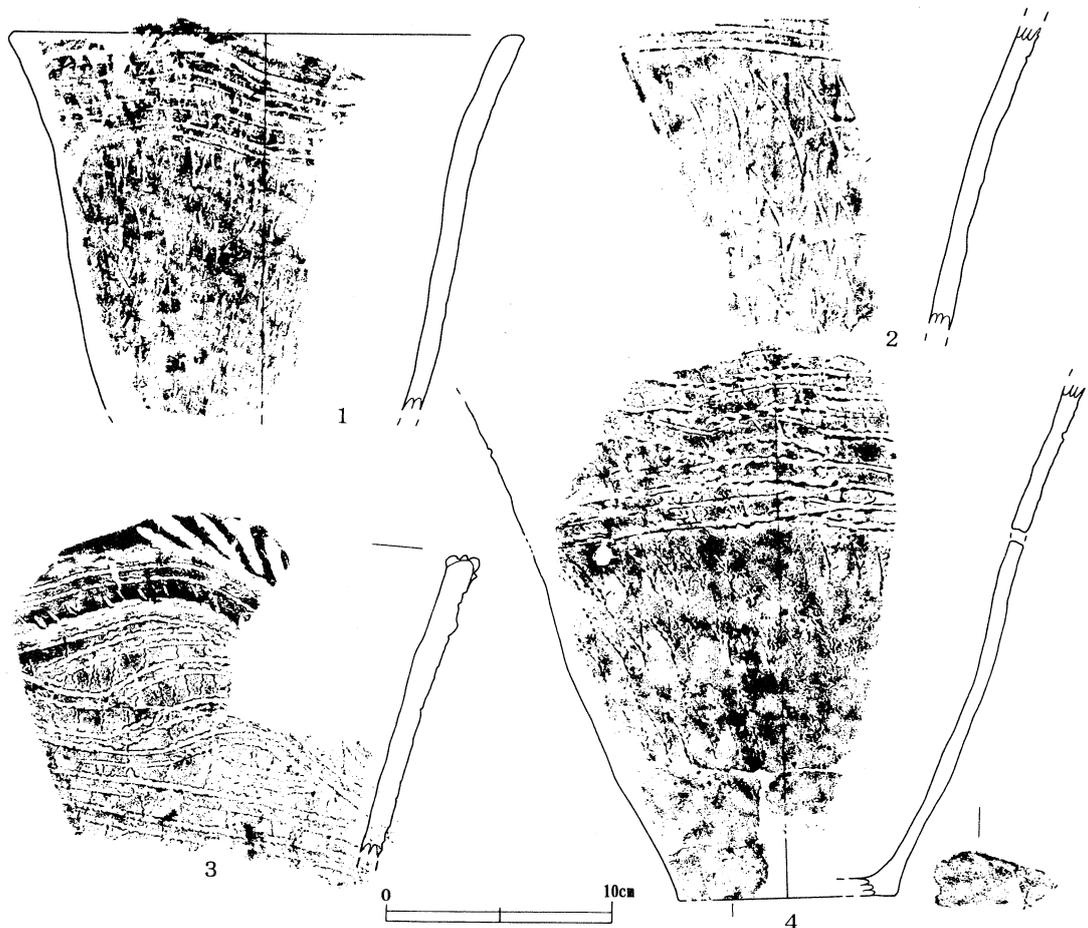
土層凡例 S1-2

番号	色調	含有物	粘性	縮まり
1	暗褐色	ローム粒、ブロック少量	強い	強い
2	暗褐色	ローム粒、ブロック少量、橙色多量	強い	強い
3	橙褐色	橙褐色多量	強い	強い
4	褐色	ローム粒やや多、ブロック少量、橙褐色土少量	強い	強い
5	明褐色	ローム粒、粒多量、橙褐色土少量	強い	強い
6	黒褐色	ローム粒、炭化粒子極少量	強い	強い

土層凡例 S1-2 炉跡土層

番号	色調	含有物	粘性	縮まり
1	赤褐色	焼土粒、粒子多量、炭化物少量	弱い	やや有り
2	淡い赤褐色	炭化物やや多量、焼土少量	弱い	やや有り
3	赤褐色	焼土粒、ブロック多量	弱い	やや有り

第5図 2号住居跡実測図



第6図 2号住居跡出土土器拓影図

### 3 土坑

#### 1 1号土坑と出土遺物(第7図、10図)

本遺構は1号住居跡と2号住居跡の間に位置して検出された遺構で、長径1.4m、短径1mほどの倒卵形状を呈し中央部で27cmと挿鉢状の掘りこみが見られた。本遺構は牛蒡栽培により攪乱され遺存状態は悪い。

覆土は暗褐色、褐色の2層で締まり粘性は強い。遺物は総数7片と少なく図示したものは1と3のみ、波状を呈する深鉢で大型の爪形文を横位に2列下位に平行沈線が斜めに施文している。やや多量の雲母を含む、焼成は良く暗褐色。3は小型の浅鉢で器肉は薄く僅かに撚糸文が見られる。細石を少量含む。諸磯b式。

#### 2 2号土坑と出土遺物(第7図、10図)

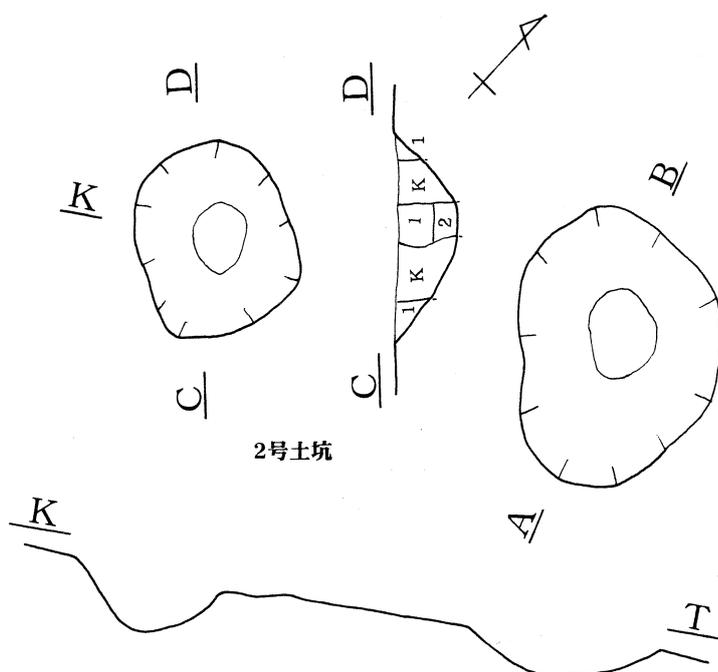
本遺構は、1号土坑の西側に位置し検出され長径1m、短径80cmのやや方形気味であった。掘り込みは30cm深く中央部が深くなる挿鉢形。覆土は褐色、明褐色の2層に分けられた。粘性、締まりは強い。本土坑も牛蒡栽培によりトレンチャーによる遺存状態は悪い。

遺物は総数10片と少なく図示した2、4、5、の3片である。2は口唇部に指頭による押圧が加えられ、以下アナダラ属の山形文が粗雑に施文され黄褐色。器面は粗雑で内面は綺麗に磨消されている。焼成は良く細石多い。4は頸部が内湾気味の椀状の器形か、口縁部を欠失し胴部にはアナダラ属の山形文が密に施文され細石の混入が多く器肉は薄く、焼成は良い。5は胴部で平行沈線と変形した爪形文が見られ細石が多く黄褐色。浮島I式。

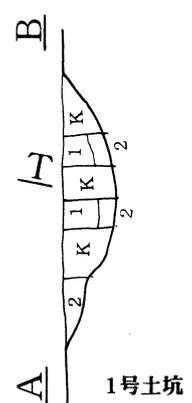
#### 3 3号土坑と出土遺物(第7図、10図)

本遺構は2号住居跡の中に認められたもので長径70cm、短径40cm程の長円状で覆土は黒褐色のみ。遺物は少なく3片で図示したのは6のみで口縁部に二条の爪形文を配する。雲母、細石の混入が多く見られる深鉢形土器。

下位にアナダラ属の山形文の一部が見られる、少量の繊維を含む。



2号土坑



1号土坑

ML34,20m

土層凡例 SK-1

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	暗褐色	ローム粒、ブロック多量	強い	強い
2	褐色	ロームブロック多量	強い	強い

土層凡例 SK-2

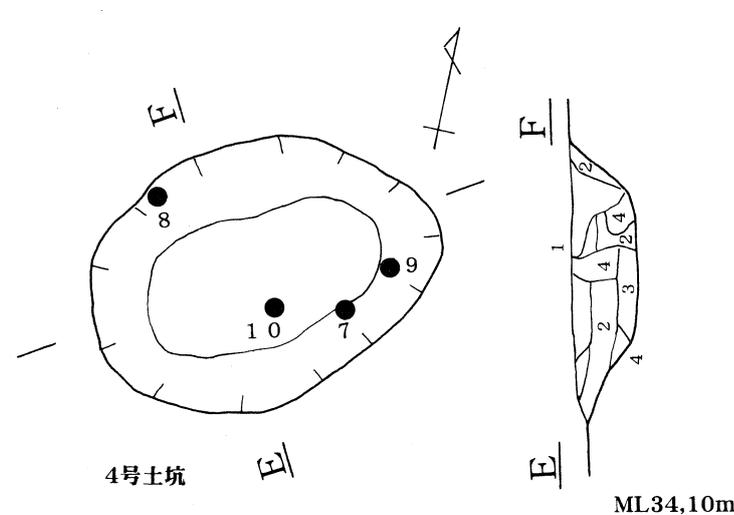
番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	黄褐色、ロームブロック多量	強い	強い
2	明褐色	ロームブロック多量	強い	強い

土層凡例 SK-4

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒褐色	ロームブロック少量	強い	強い
2	暗褐色	ローム粒子多量	強い	強い
3	暗褐色	ローム粒子、ブロック少量	強い	強い

土層凡例 SK-5

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	褐色	黄褐色土、ロームブロック多量	強い	強い
2	明褐色	ロームブロック多量	強い	強い

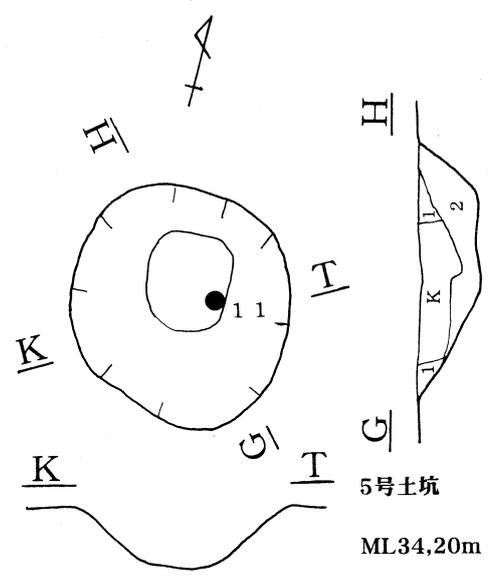
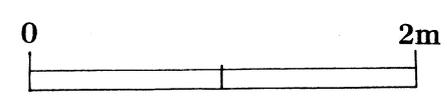


4号土坑

ML34,10m



3号土坑



5号土坑

ML34,20m

第7図 1. 2. 3. 4. 5号土坑実測図

#### 4 4号土坑と出土遺物（第7図、10図）

本遺構も2号住居跡の中に黒色土とハマグリを主体とした貝層を持つ遺構で長径1,9cm短径80cmの倒卵形を呈し、掘りこみは35cmと浅いが立ち上がりはやや強い。覆土は黒褐色、暗褐色など3層に分けられ、各層とも粘性、締まりは強い。中にはハマグリ、アサリの貝殻がみられたが牛蒡栽培により攪乱が入り貝層の生きていた部分は僅かであった。（図版6）大部分の貝の表面には貝汁が付着していた。

遺物は38片と多く認められたがいずれも細片で図示できるものは少なかった。図示した7～10であり、7は口縁部下に大型の爪形文を2条施文、胴部は半円、木の葉状に施文する。焼成は良い。8は大型の深鉢と考えられ3段の隆帯に指頭押圧が加えられている。やや砂の混入が多い。褐色。9は細い平行沈線の地文の上に半戴竹管による沈線が施文、モチーフは不明細石の混入が多く僅かに繊維を含む。10は変則的な爪形文と思われる口縁部片で口縁部から内側は磨消されている。浮島I式の範疇か。II式初頭か。

#### 5 5号土坑と出土遺物（第7図、10図）

本遺構は、2号住居跡の北側に位置し検出された。大半が牛蒡栽培による攪乱が入り遺存状態は極めて悪い。長系1,3m短径1,1mの楕円形状プランを呈する。掘りこみは浅い鉢状で、深さは30cmを測る。覆土は褐色、明褐色の2層で締まり、粘性は強い。

遺物は総数5片と少ない。図示したのは11のみで深鉢の胴部片、繊維を多量に含みアナダラ属の山形文を配する。

#### 6 6号土坑と出土遺物（第8図、10図）

本遺構は、調査区の北東隅部に位置し検出された。長径80cm、短径70cmの円形状を呈するもので掘りこみは20cmと浅く皿状を呈する。底部はやや変則的でハート状を呈する。

遺物は少なく総数5片で何れも細片であった。図示した12,13は口縁部に一条の爪形文と平行沈線による鋸歯文を持つ淡い赤褐色で細石を含む。浮島I式の範疇か。

#### 7 7号土坑と出土遺物（第8図、10図）

本遺構は、2号住居跡の西側に位置し、小範囲に7,8,9と3基が集中し検出された。長径70cmほどの円形状を呈する。掘り込みは20cmと浅く鍋底状。本遺構は攪乱を受けず、遺存状態は良い。

覆土は橙褐色、黄褐色、褐色、明褐色の4層に分けられ層序はレンズ状の自然埋積と考えられ粘性、締まりは強い。

遺物は10片出土したが、細片のため図示できるものは14のみ。深鉢の胴部で疎らな角押し文？を施しナデ調整が行われ不明瞭。細石を含み焼成は良い。

#### 8 8号土坑と出土遺物（第8図、10図）

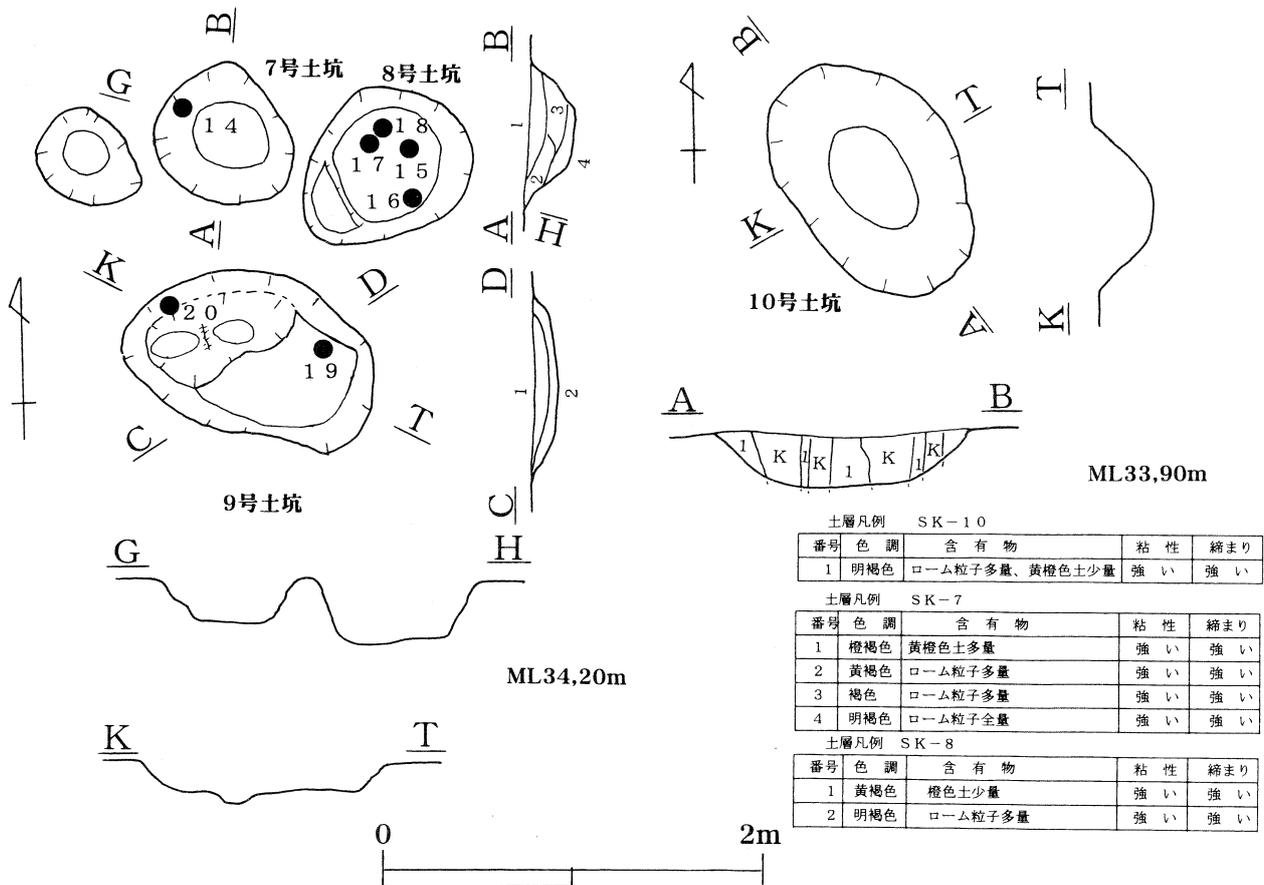
本遺構は7号土坑に隣接し長径1m、短径80cm、掘り込みは30cmとやや深く鍋底状。覆土は3層で橙褐色、黄褐色、暗褐色で何れも粘性、締まりは強い。7号土坑に相似する。

遺物は総数25片と多く認められたが何れも小片。図示したものは4片で15は口縁部に平行沈線を2条施文、胴部は木の葉状構成？沈線が見られ地紋はアナダラ属の山形文。細石、雲母を少量含む。淡い赤褐色で焼成は良い。16は拓本では明瞭ではないが円形刺突文が見られる胴部片で地紋に撚糸文を持つ。細石、雲母を含む。17は撚糸文、18はアナダラ属の貝殻文、何れも深鉢胴部片。浮島I式の範疇か。

#### 9 9号土坑と出土遺物（第8図10図）

本遺構は7,8号土坑の西側に位置し近接している。長径1,35cm、短径90cmの長円形状、掘り込みは100cmと浅く皿状を呈する。覆土は2層でレンズ状の自然埋積を示し、黄褐色、明褐色の2層で粘性、締まりは強い。

遺物は15片程見られたが何れも小片。図示した19,20はいずれもまばらな撚糸文を配するのみで19は深鉢口縁部で波状、細石、砂の混入が多く器面は荒い。20は胴部片で胎土は精選され調整、焼成は良い。浮島I式。



第8図 7. 8. 9. 10号土坑実測図

### 10 10号土坑と出土遺物 (第8図)

本遺構は調査区西北隅部、やや北側に傾斜する位置し検出された。長径1,35cm、短径90cmの長円形プランを呈する。掘り込みは25cmとやや深く弱いU字状。覆土は明褐色の1層のみで粘性、締まりは強い。遺物は細片2点で図示しなかった。

### 11 11号土坑と出土遺物 (第9図)

本遺構は調査区西側の7、8、9号土坑群の西側に位置し11、12、13の3基が近接している。その中の北側に位置する11号は長径90cm、短径50cmの長形状プラン。底部は東西に僅かに掘り込が見られる。

覆土は2層でレンズ状の埋積。色調は黄褐色、粘性、締まりは強い。

遺物は小片ながら10片程見られ、21は細い撚糸文が施文され、細石を多量に含む。22は口縁部で無文23は口縁部に刺突?らしい痕跡も。焼成は良い。浮島I式。

### 12 12号土坑と出土遺物 (第9図、10図)

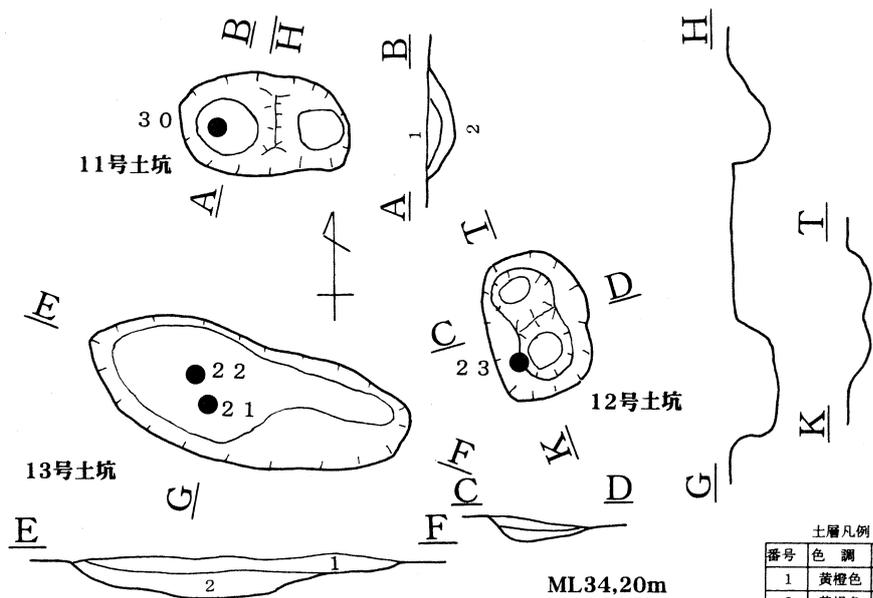
本遺構は11号土坑の南側に位置し検出され、長径80cm、短径50cmで11と規模、プラン共に相似する。底部の掘り込みも同様で覆土、粘性も同様であった。

遺物は5片と少なく図示したのは23の1点のみで撚糸文を施文する鉢形土器。焼成は良い。

### 13 13号土坑と出土遺物 (第9図、10図)

本遺構は11、12号の西側に位置し長径1,75m、短径60cmの長円状プランを呈する。底部は西側がやや深くなる。掘り込みは20cmとやや深い。覆土は12同様で粘性、締まりも同じ。

遺物は細片が10片程出土したが、図示出来るものはなかった。

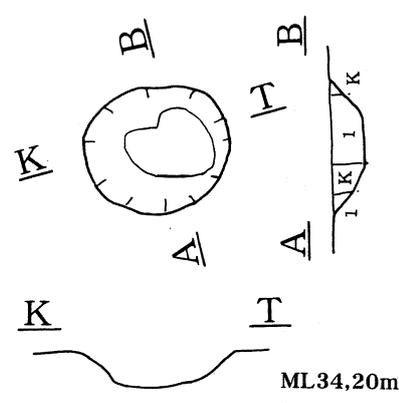
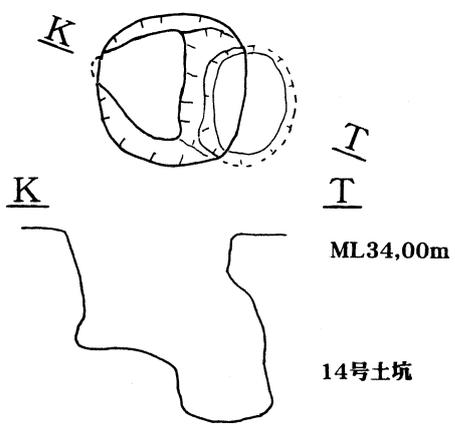


土層凡例 SK-11

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄橙色	黄橙色多量	強い	強い
2	黄褐色	ローム粒子多量	強い	強い

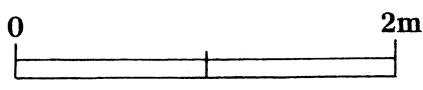
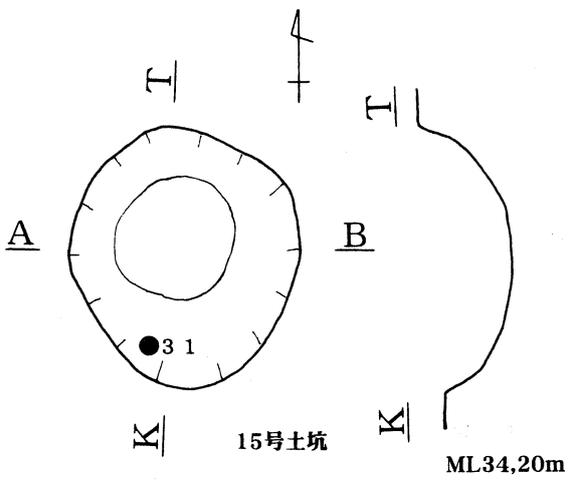
土層凡例 SK-12・SK-13

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黄褐色	黄褐色土多量	強い	強い
2	明褐色	ローム粒子多量	強い	強い



土層凡例 SK-6

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	明褐色	黄褐色土、ローム粒子多量	強い	強い



土層凡例 SK-15

番号	色調	含有物	粘性	締まり
1	黒褐色	ローム粒、粒子多量	やや有り	やや有り
2	黒褐色	ローム粒極少量	やや有り	やや有り
3	暗褐色	ローム粒子多量	やや有り	ややあり

第9図 6. 11. 12. 13. 14. 15号土坑実測図

14 14号土坑と出土遺物 (第9図、10図)

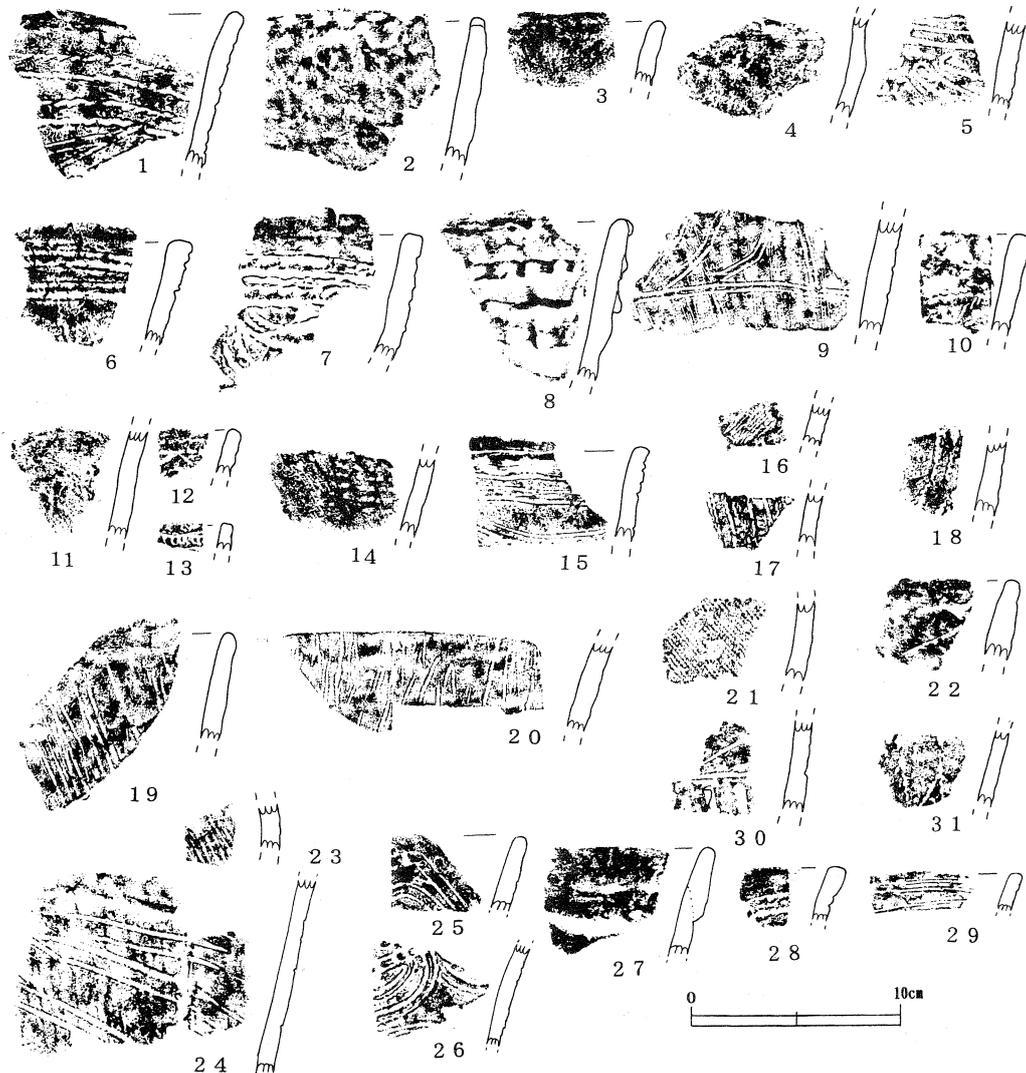
本遺構は2号住居跡の南側に位置して検出され、径80cm程の円形状に60cm程掘り込、更に東側にずれて40cm程長円状に二段に掘り込む本遺跡唯一のプランであった。上部に比べ半分ほどの規模、形態であった。覆土は4層前後に分けられた。上部では黒褐色層が大半を占め、下部では暗褐色、黄褐色、明褐色等であり、埋積からは下位は半ば埋められ、上部は自然埋積が考えられ粘性、締まりは強い。(土層図無し)

遺物は40片程出土したが個体数からは30片前後であった。24は平行沈線、棒状工具による太い沈線が連続して施文され、少量の雲母を含む。25は深鉢形土器の波状口縁部で波頂部に向かい三角形、26が胴部と思われ円形状モチーフに施文。焼成は良い。27は口縁部が肥厚し爪形文を横位に施文、黒褐色。少量の雲母、細石を含む。28は口縁部に幅広な隆帯を貼付無紋、深鉢で波状を呈する。雲母、細石を少量含み焼成は良い。29も幅広な無文部を持つ深鉢形土器で胴部にまばらな平行沈線を施す。黒褐色で細石を含み、器面は粗雑。焼成はやや悪い。

15 15号土坑と出土遺物 (第9図、10図)

本遺構は1号住居跡の東側に位置し検出されたもので長径1,4m、短径1,2mの倒卵形状プランで掘り込みは椀状を呈し、深さ35cmを測る。覆土牛蒡栽培による攪乱が見られたがレンズ状の自然埋積を示し3層に分けられそれぞれ黒褐色、暗褐色で粘性、締まりもやや有る。

遺物は少なく総数4片で図示出来るものは胴部片の30のみ地紋のアナダラ属の山形文を配する。暗褐色で雲母、細石を少量含む。



第10図 1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13.14.15号土坑と出土遺物出土遺物拓影図

## V 結びにかえて

本遺跡は新たな発見であり、以前の分布調査では確認出来ない程遺物は、少なかった。確認調査前の踏査でも一片も認められなかった。周辺の地形は、南、西側に支谷最奥部の池が存在、言わば湧水地にあたり、今は、あまり使用されない溜池が存在する。

以上の地理的条件、立地から遺跡存在も想定されたため、台地の長軸方向で最高所に3本のトレンチを設定した。北側の1トレンチでは遺構、遺物は皆無、牛蒡のトレンチャーとビニールのみ。2トレンチでも遺物は皆無ビニールと牛蒡栽培の攪乱のみであった。

3トレンチでも牛蒡栽培による攪乱とビニールが認められ、また初めて中央部の最も高所部分から少量の土器、焼土が認められた。この結果を参考に2と3トレンチの間に2本のサブトレンチを設定し更に確認調査を進めた所畑地の境界、攪乱の無い部分から土坑状遺構が3基認められ少量の浮島式の遺物が検出された。その為部分的に拡幅を行った所、少量の遺物と焼土が認められた。その結果新発見の遺跡とした。地主の話によると以前大型機械で高い部分を削平し平坦な耕地に替えたとの話であった。

確認調査での得られた資料に基づき焼土、遺物の認められた高所部分1000㎡部分を調査区とした。調査結果に基づいて耕作土を除去したところ、住居跡2軒、土坑15基が確認できた。

遺構の散布状態や遺物から、本遺跡は極短い期間における集落跡と考えられた。

調査の結果も同様な傾向がみられた。以下簡単に遺構と遺物について述べて結びにしたい。

### 遺構と遺物

検出された遺構は何れも浅く、出土遺物も少なく牛蒡栽培による攪乱がひどく満足な状態で遺存していたのは土坑5基のみであった。住居跡は上部がカットされ覆土は浅く、遺存状態は最悪に近い状態であった。

2回の確認調査によって時期と遺構は、大掴みに把握していたため調査は短期間で終了した。

検出された2軒の住居跡は隅丸方形プランを呈するもので1号住居跡では柱穴、炉址が認められなかった。住居跡東側隅部も前述の通りでやや不明確で浅い。従って遺物も少なく、小破片のみである。

2号住居跡は覆土中に貝殻を含む小土坑が存在したが、トレンチャーにより攪乱されて貝層状態は不明瞭であった。住居跡は、壁面に添って一段テラスがあり二段に掘りこまれ、南側では一部欠失する。この主因は出入り口の関係からか、。柱穴は4本認められたが、北西隅側のものは浅く不明確。柱穴周辺に副柱穴と思われるものも認められ、これらは建替えなのか、支柱穴なのかは不明であった。炉は南側に位置し、床面を掘りこんだ地床炉で周囲に土器、石などの囲いの痕跡は認められなかった。覆土は攪乱が多く、色調は黄、橙褐色等が主体であった。

遺物は大半が細片で出土、復元によって器形が窺えるものは僅かであった。

土坑は円形、倒卵形、長円形等のプランが認められた。何れも遺存状態は悪く、掘り込みは削平の為総じて浅い。覆土は黒褐色土と橙褐色が認められた。これらは埋積状態の差違と考えられるもので人為的、時間的差と考えられる。中でも覆土に貝殻を持つ4号土坑と貯蔵穴状掘り込みの14号、円形で黒褐色覆土の15号土坑などがみられた。

各遺構出土土器は、大型波状、波状、平縁の口縁部を持つ深鉢形土器が見られた。これらの口縁部は無文と波頂部に刻み目を施すもの、口縁部下には爪形文、または平行沈線を数条施すものがあり一部に指頭押圧を加える物もみられた。胴部文様はアナダラ属やハマグリ等による山形文や撚糸文が地文として施されている。土器は住居跡、土坑を問わず同様な傾向を示していた。

胎土は繊維と雲母を含む物が見られ、多量、少量の細石(砂粒)を含みやや粗雑な調整と丁重なものがあった。多量に繊維を含む黒浜式も10片程見られた。

図示した出土土器から本遺跡の時期は諸磯系統の土器も少量認めるが、1号住居跡は浮島I式中葉、2号住居跡は後半と考える。

最後に本時期の調査例は極端に少ないので、本遺跡の住居跡と土坑、集落の関係を推察することは危険で有るが多少の整理をしておきたい。

住居跡は2軒で上部を削平され遺存状態は悪いが、複合関係は無く約8mの間があった。周辺には円形状の土坑、また3基ほど密集する土坑群の存在が二ヶ所認められた。これらは当時期における少集団の生活単位を意味するのか。

住居跡の時期は出土土器から、新旧の二つの時期に細分が可能であり、これは浮島Ⅰ式中葉と末またはⅡ初頭と捉えられると考える。そしてこれらに伴う土坑群は墓坑の可能性が強く、円形で散在するものと群集する二つのパターンが認められた。

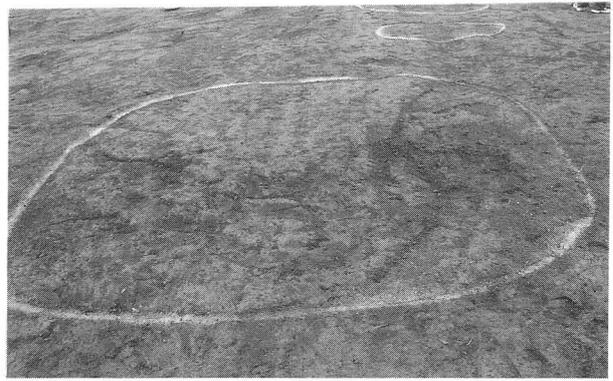
前期集落の基本パターンの存在が明確でない霞ヶ浦東岸域で、本例の持つ意義は極めて高く、集落、住居跡のあり方は今後の本時期の研究に寄与すると思ふ。浮島期における前期集落の調査の類例の増加によって資料の増加を望み、当時期の集落研究の一助になれば幸いである。

そして本調査が遺物も皆無に近い、支谷最奥の地に於いて発見されたものであり、鹿行地域ではいまだに図面上での審査で済ます市町村も存在しており、開発関係の場合最低でも確認調査の重要性を指摘し結びに替へたい。

参考文献	中佐倉貝塚	平成11年	江戸崎町佐倉地区遺跡発掘調査会
	鶴ヶ居遺跡報告書	昭和47年	北浦村教育委員会
	荒原神社馬場前遺跡	2006年	行方市遺跡調査会



調査区全景



1号住居跡プラン



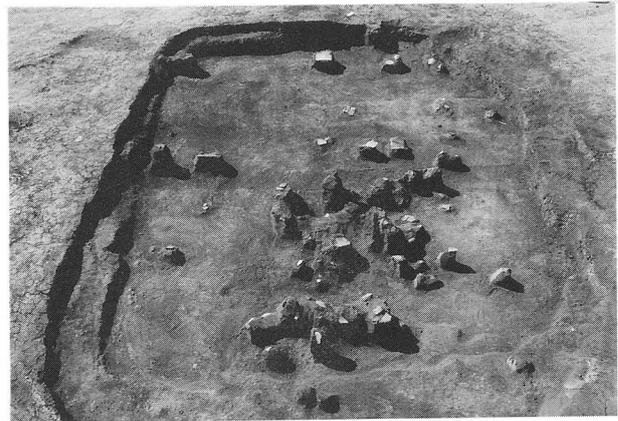
1号住遺物出土状態



同完掘



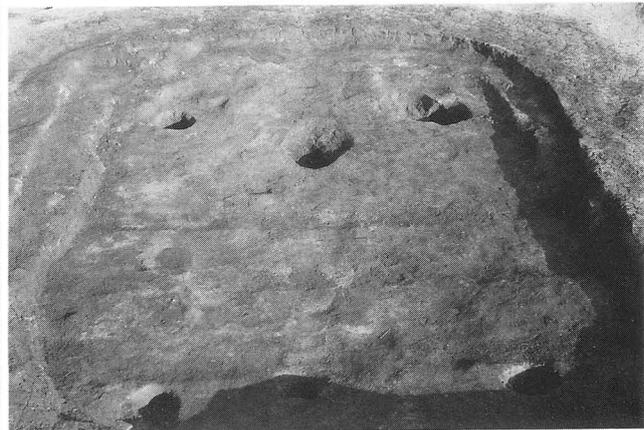
2号住プラン



同遺物出土状態



同遺物出土状態

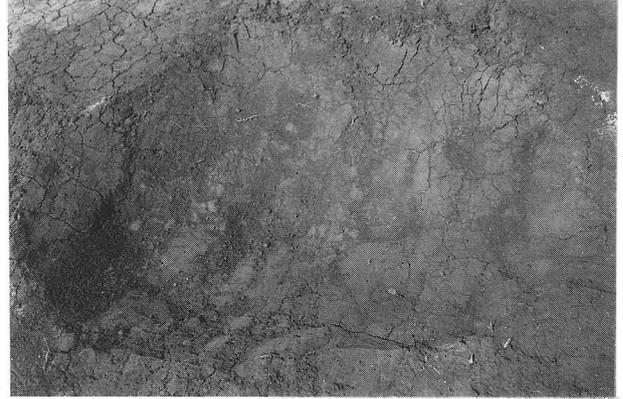


同完掘

P1-1 調査区全景 1号住居跡プラン 1号住遺物出土状態 同完掘  
同遺物出土状態2号住プラン 同遺物出土状態 同遺物出土状態 同完掘



1号土坑完掘



2号土坑完掘



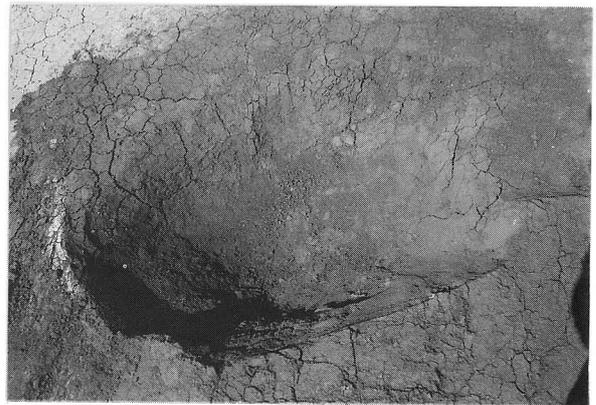
3号土坑土層



4号土坑土層



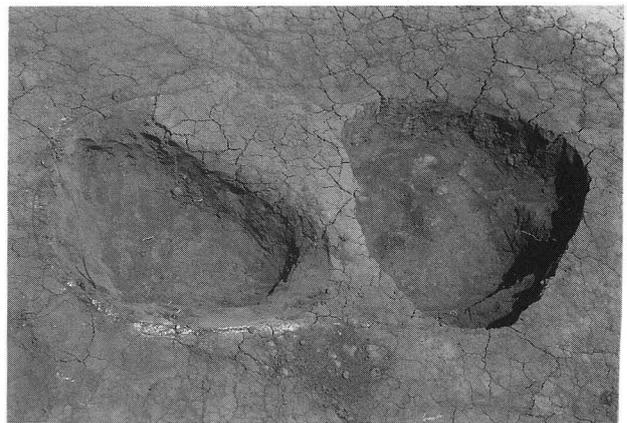
同完掘



5号土坑完掘



6号土坑完掘

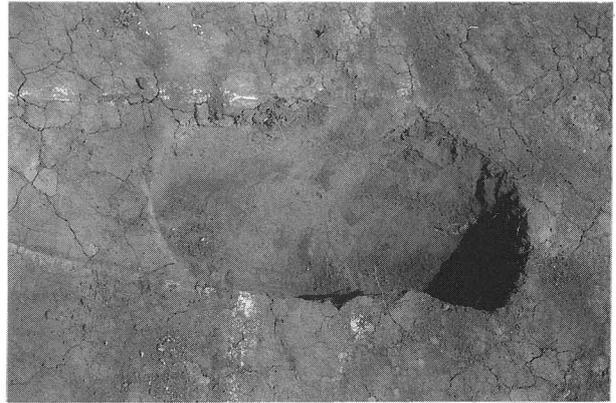


7号土坑完掘.8号土坑完掘

PL-2 1号土坑完掘 2号土坑完掘 3号土坑土層 4号土坑土層 同完掘  
5号土坑完掘 6号土坑完掘



9号土坑完掘



11号土坑完掘



10号土坑完掘



12号土坑.13号土坑完掘



14号土坑完掘



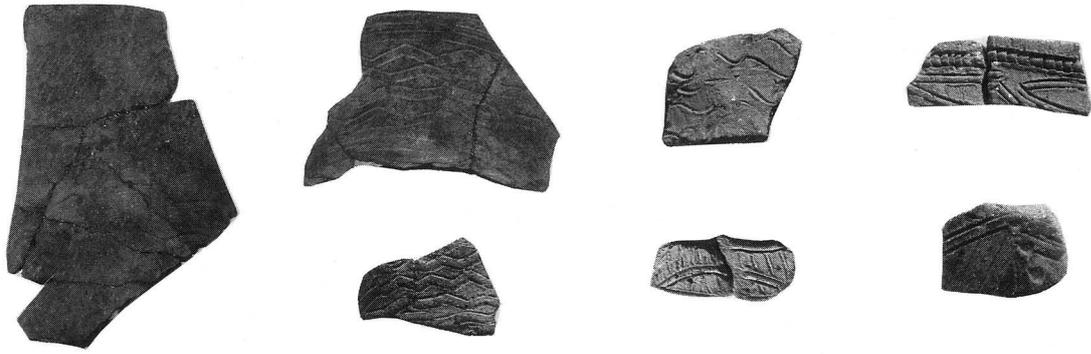
同底部



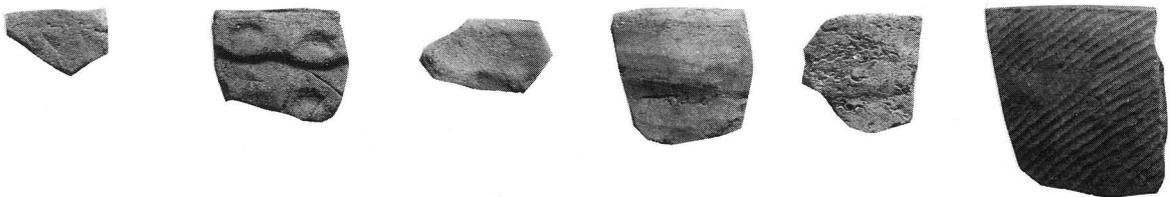
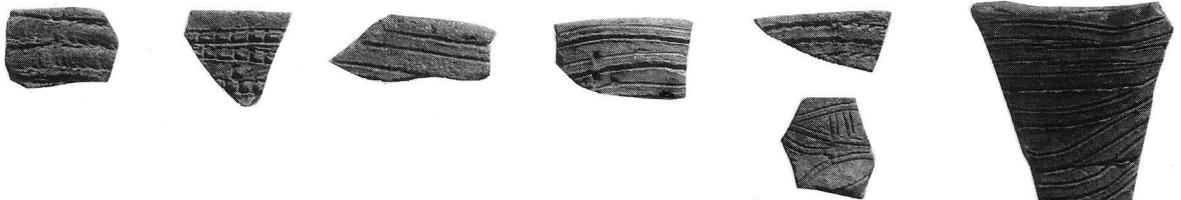
15号土坑完掘



PL-3 7号土坑完掘.8号土坑完掘 9号土坑完掘 11号土坑完掘 10号土坑完掘  
12号土坑.13号土坑完掘 14号土坑完掘 同底部 15号土坑完掘



1号住居跡



2号住居跡

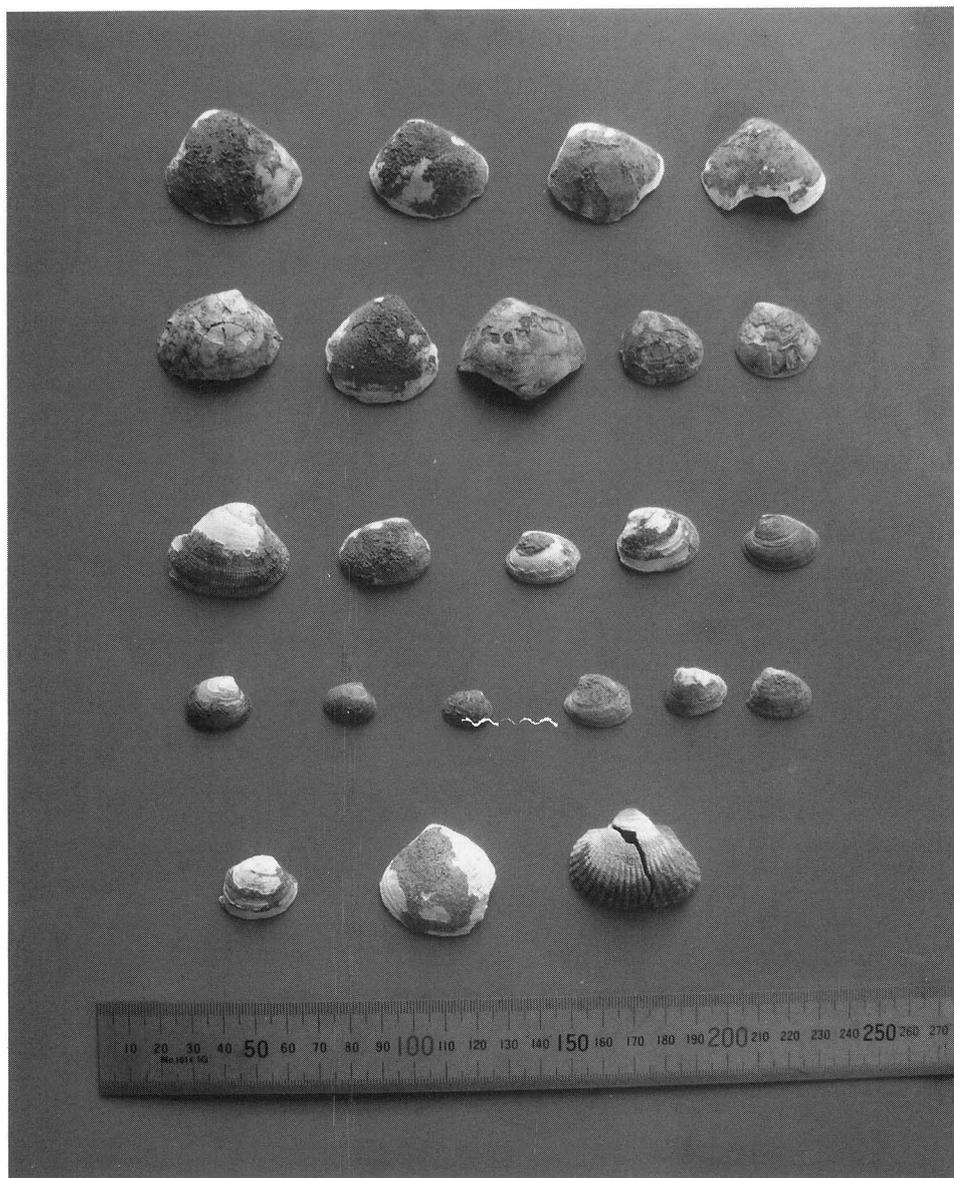
PL-4 1号住居跡.2号住居跡出土遺物



PL-5 2号住居跡.1.2.3.4.5.6.7.8.9.10.11.12.13,



14号土坑



4号土坑

PL-6 14.4号土坑出土貝類

茨城県行方市  
細 田 平 遺 跡  
発掘調査報告書  
2006年12月  
編集 鹿行文化研究所  
汀 安衛  
鹿嶋市青塚718-1  
発行 行方市教育委員会  
行方市遺跡調査会  
印刷 (株) さんゆう社印刷  
行方市玉造甲2641